

「神の恵みに感謝し自分を神に献げなさい」

ローマ6：12－14

堀田修一 23・2・26

I 「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけません」：12。

「ですから」は大切な接続詞。聖書を正しく解釈する鍵は、前後関係、文脈、接続詞を大切に読み味わう事です。この「ですから」は、6：1－11の「先行的恵みがあるのですから」という意味。6：1－11を分かりやすくまとめると、「主につくバプテスマ（主を信じた時に内住された聖霊により主につく＝結びつく、霊的な結合のバプテスマ）を受けた私たちはみな、主の十字架の死と葬りと復活にあずかるバプテスマの恵みを受けた。罪の赦しと神が喜ばれる愛と聖さに生きる新しいいのちをいただいている。私たちは、主によって＝霊的に結合されて、主と一体とされた自分は罪に対して死に、神に対して生きている者と、その恵みの事実を認める」神の先行的な恵みが与えられている→「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけません」：12。聖書全体は、「あなたは、自分の罪の欲望に従わないように、自分で頑張りなさい」とは命じていない。それは不可能。神は、ご命令を与えられる時は、常に、そのみことばを実行する先行的恵み、力をその前に与えておられる→「御霊によって（内住の助け主である聖霊なる神により頼んで）歩みなさい。そうすれば、肉（罪の性質）の欲望を満たすことは決してありません。…御霊（いのちのみことば）に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。…肉のわざは…淫らな行ない、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術（占い）、敵意（憎しみ、恨み）、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。…しかし、御霊の実（御霊が、ぶどうの木である主にぶどうの枝である私たちを結びつけ、霊的な養分を与え結ばせて下さる実）は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です」ガラテヤ5：16－22）。

II 「また、あなたがたの手足を不義の道具として罪に献げてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者としてあなたがた自身を神に献げ、また、あなたがたの手足を義の道具として神に献げなさい」：13。ここでも、神は禁止の命令だけではなく、「むしろ」と先行的な恵みと積極的な命令を与えておられる。これが律法主義的な信仰生活ではなく、神の恵みに感謝し喜んで神に従う信仰生活の秘訣です。このみことばのポイントは、「私たちの手足を不義の道具として罪に献げてはいけません」で終わらず、「むしろ、死者の中から生かされた者として」と続いていることです。つまり、私たちは、主を信じ救われる前は、「自分の背きと罪の中に死んでいた」（エペソ2：1）。しかし、主を信じ、聖霊による新生、新しいいのちをいただき、主に霊的に結合し、主と共に死者の中から生かされた、主の復活のいのち、永遠のいのちをいただいている。感謝します。人は、悪いことをしてはいけないという命令だけでは、窮屈な人生となり、希望ある目標がなく、結局、悪に戻ってしまう弱さがある。それゆえ、神は、「〇〇をしてはならない」だけではなく、恵みと力を先ず与えて、積極的に「〇〇をしなさい」と命じられる。ここでは、「私たちの手足を罪に献げてはいけません」で終わりではなく、私たち

に神の恵みへの感謝から生まれるやる気が出るご命令を下さる→「むしろ、死者の中から生かされた（主を信じ御聖霊により新しいいのちをいただいた）者としてあなたがた自身を神に献げ、また、あなたがたの手足を義の道具（神のみこころに喜んで従う手足となる）として神に献げなさい」：13。神が私たちに自分を神に献げなさいと命じられるときに、いつも、自覚すべき事があります。「私たちが（先に）神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」（Iヨハネ4：10）。私たちが神に自分を献げることが先にあるのではなく、先ず神が私たちを愛して御子を私たちの罪のために十字架につけられた。つまり、私たちにまず、「献げよ、献げよ」と強制される神ではない。統一教会の教えは全く間違っている。御父は、まず私たちを愛して大切なひとり子イエス様を献げ十字架に付けられた。御子イエスは、先ず私たちを愛してご自分のいのちを献げ十字架につき私たちに与えられた。聖霊なる神は、主を信じる私たちの心に宿り、神の愛を注ぎ続けておられる。信仰生活とは、先行的神の恵みへの応答である。常に先にある神の恵みに感謝しつつ神に自分を献げたい。

Ⅲ「罪があなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下にではなく、恵みの下にあるのです」：14。

1. 私たちが、主を信じるまでは、私たちの主人は罪であり、罪が私たちの支配者でした。しかし、私たちが、「イエスは主（救い主、神、ご主人）です」と信じる時、私たちを支配している主人が交代したのです。主人、支配者である罪から私たちは解放され、御子イエスが私たちの主人となられた。私たちの心に主が救い主、神、主、ご主人、支配者として入られた。「御父は、私たちを暗闇（悪魔、罪）の力から救い出し、愛する御子のご支配の中に移してくださいました」（コロサイ1：13）。驚くべき恵み！但し、これは、私たちキリスト者は、二度と罪を犯さなくなったという意味ではない。罪が心の中から消えたという意味ではない。罪の力から解放された主に頼り、まだ心に残っている罪と戦うことが出来るという意味です。その罪との戦いはローマ7章で詳しく語られています。

2. 「あなたがたは律法の下にではなく」の意味。これは、7章で全面的に語られる。「律法からの解放」。私たちは、主を信じるまでは、律法の支配下にありました。その律法は私たちに絶えず、「あれをすべき。これをすべきだ。これもできない。あれもできていない。なぜ愛がないのか」と責めます。しかも律法は、様々な要求をするだけで、それを実行する力は与えてくれない。私たちは自分の力で努力し、律法の要求を全部果たさなければならない。それだけでなく、律法は私たちがそれを守れないとき、私たちを容赦なく罪に定め、刑罰と呪いをもたらし、永遠の死と地獄へと定めます。律法は「違反を示すためにつけ加えられたもの」（ガラテヤ3：19）だからです。律法は違反、罪を示すが、違反した者、罪を犯した者を救うことはできず、ただ滅びに定める。これが律法の下にある人々の現実。しかし、パウロは高らかに宣言する。「あなたがたはもう律法の下にいない！」と。それは、素晴らしいキリストにあって可能になった。キリストが、三十三年の生涯で律法を完全に守られ、十字架で私たちが受けるべき罪の刑罰を完全に受け、律法の要求を全うされた。それゆえ、主を信じる者は律法の要求から解放される。但し、キリスト者にとり、律法は、必要のないものではなく、救われた神に感謝して、神に喜んで従う基準として律法は有益。救われるために律法を守るのではなく、深い神の恵みで救われたので、神に感謝しつつ、律法＝神のみこころを守る人生に変えられ続ける。

3. 「恵みの下にある」。私たちは主を信じ主と霊的に結合したとき、主にあって死に、律法の支配から解放され、神の恵みの世界に移された。「恵みの下にある」とは、主が十字架と復活により獲得された恵みの契約、新しい契約が支配する世界。私たちは救われるために律法的な努力をする必要はなくなった。主の十字架の恵みで完全な赦しが受けられる。主を信じた後、日々の生活で罪を犯してしまうことが皆ある。その時、罪を隠さず、神に罪を告白するなら、神は主の十字架の恵みで赦され、主の血と聖霊により聖め続けて下さる。そればかりか、神は私たちに新しいいのち、主の復活のいのち、試練の中でも生きるために必要な新しい力を与えて下さる。ハレルヤ！

祈り：色々な試練や誘惑との戦いがあったとしても、三位一体の神の恵みに目を留め、主とますます固く結びつき、偉大な救いの恵みに生きる者として下さい。